

上級日本語学習者の作文に現れる 「主述の対応関係の不具合」の実態

作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究

小口悠紀子・山田実樹

◆要旨

本研究は、日本語学習者の作文において、読み手の理解を妨げたり、稚拙な印象を与えたりする「主述の対応関係の不具合」に関する基礎研究である。学習者の作文添削をしていると、主題または主語と述語が文法的に対応していないことにより、動作主が曖昧になっていたり、文意が取りにくかったりすることがある。いわゆるねじれ文や、主述の不照応、不一致などと呼ばれるこの問題は、学習者のみならず日本語母語話者の小・中学生にも見られ、国語教育の分野では近年、問題解決のための研究と工夫が進められている。それに対し、日本語教育においては具体的な対策は取られておらず、教材を観察しても配慮した記述はほとんど見られない。そこで、今後の作文指導や教材開発に役立てるため、本稿ではYNUコーパスを用いて、学習者の実際の作文から主述の不具合と見られる文を抽出し、その特徴を考察した。

◆キーワード

主述の対応関係の不具合、ねじれ文、作文、YNUコーパス、アカデミック・ライティング

◆ABSTRACT

This study is about “grammatical errors in the correspondence between subjects and predicates” written by Japanese learners. In the learner’s writing, the agent may be ambiguous, or the meaning of the sentence may be difficult to understand because the subject or the topic and the predicate do not correspond grammatically. This problem is found not only in learners but also in elementary and junior high school students of Japanese. In recent years, research to solve this problem has been progressing in Japanese language education as a native language. However, there is no concrete research in Japanese language education as a second language. Therefore, we analyze the characteristics of the learner’s actual composition using the YNU corpus and report the results.

◆KEY WORDS

correspondence between subject and predicate, Nejire-bun, writing, YNU corpus, academic writing

Matching of the Subject and the Predicate in Japanese Language Learner’s Writing Basic Research to Improve the Efficiency of Writing Instruction and Learning

YUKIKO KOGUCHI, MIKI YAMADA

1 はじめに

例1) 結婚相手に大事なことは性格がよくて優しいです (⇒ことです)。

例2) これは兄が昨日うっかり壊れたんです (⇒壊したんです)。

日本語学習者の作文添削をしていると例1、2のような誤用に出会う。こうした問題は、学習者のみならず日本語母語話者の小・中学生にも見られ、文意が伝わりにくくなることに加え、読み手に稚拙な印象を与える恐れがある。これらは従来、文法的に異なる問題として扱われてきたが、いずれも主題または主語と述語が文法的に対応していないことに起因している。そのため、文法項目として既習である中級以上の学習者に対しては、主述の対応として意識化させる指導を行うことで誤用の回避や自己修正を促せる可能性がある。ただし、学習者の場合、母語の影響を受ける可能性があることや、日本語の文法的直観を持たないことを考慮し、問題の所在を具体的に分析した上で、指導に結び付けることが重要である。

国語教育においては、平成21年全国学力・学習状況調査中学校国語Aの問題において、名詞述語文の主述が対応するよう修正させる問題が出されたが、正答率が50.8%と極めて低かったことをきっかけに、小中高校生の主述の不具合についての調査や学習対策が進んでいる(矢澤2014, 松崎2015)。しかし、日本語学習者を対象とした研究においては、授受表現や受身、自他動詞といった各項目の誤用に着目した研究はあるものの、主述の対応関係の不具合として実際の学習者の作文例をもとに調査した研究はほとんどない。楊(2014)や砂川(2017)は日本語学習者の作文において、母語話者と同様に名詞述語分をはじめとする主述の対応関係の不具合が散見されることを明らかにしたが、その原因についてはいずれも検証していない。また、小口(2017)では、名詞述語文について、日本語教科書や作文教材における扱いを調査したところ、構文内の主述の一致に配慮した記述はほとんどないことが分かった。ところが、学習者の作文に現れる主述の対応関係の不具合は、日本語教師からの作文評価に大きく影響することが指摘されている。川上(2005)は教育歴7年以上の日本語教師9

名を対象に、初級から上級の3つの習熟度ごとの作文評価の際に重視する項目について調査を行った。その結果、レベルにかかわらず、主述の対応関係の不具合は作文添削において最も重視される項目であることが分かった。日本語学習者の場合、母語話者と異なり、母語の影響を受ける可能性があることから、主述の対応関係の不具合の問題がより複雑に現れる可能性がある。作文評価に大きく影響するこの問題を防ぐために、教師は学生にどのような指導をすればいいのだろうか。また、学生はどういった点に注意すれば問題となる文を回避したり、自己修正したりすることができるのだろうか。

そこで本稿では、まず国語教育や日本語教育において主述の対応関係の不具合を取り上げている先行研究を概観する。そしてYNUコーパスを用いて、上級日本語学習者の実際の作文から主述の対応関係の不具合と見られる文を抽出し、その実態と特徴を明らかにする。なお、本稿では構文上の何らかの原因によって文法的に的確性を欠いた文のうち、読みにくさや誤解を引き起こす原因となる主語や述語に関する不具合を「主述の対応関係の不具合」と呼ぶ。

2 先行研究

2.1 日本語母語話者を対象にした作文研究

書き言葉における主述の対応関係の不具合は、「ねじれ文」や「主述の不照応」「主述の呼応の不成立」「主語と述語の不整合」などと呼ばれることもあり、国語教育においては、読みにくさや誤解につながる問題として古くから指摘されてきた。ここでは日本語母語話者の小学生から高校生までを対象にした作文資料を分析し、主述の対応関係の不具合について言及した内田・瓜生(1996)、伊坂(2012, 2013)、矢澤(2014)、松崎(2015)を取り上げる。

まず、内田・瓜生(1996)は、小学生から大学生までの母語話者480名の作文における「…は+述部」構文における問題を分析した。その結果、学年が上がるにつれて主述の対応関係の不具合の出現数は減り、大学生になるとほぼ見られなくなった。ただし、不具合の種類によって出現時期に違いがあることが分かった。伊坂(2012, 2013)は小学校5年生から中学3年生の作文を調査し、い

ずれの生徒にも主述の不整合、同一語の重複などの問題が見られることを明らかにした。この問題の背景として、まず頭に浮かんだことを主題に置いて文を書き出した後、思考や文章化の過程でタイムラグが生じ、言語表現が当初のプランと変わってしまうという作文過程が影響している可能性があるとしている。矢澤 (2014) では、先述の平成21年全国学力・学習状況調査中学校国語Aにおける正答率の低さから、名詞述語文の主述の対応関係の不具合について焦点を当てて論じている。矢澤 (2014) は別の年に出題された主語に合わせて述語を受身形に修正する問題においては、正答率が90.6%を超えていたという事実から、主述を的確な形にして対応させるという問題は、名詞述語文のように特定の構文にのみ現れる問題ではないかと指摘している。松崎 (2015) は、中学生の作文に現れる主述の対応関係の不具合に限定して調査を行い、どのような不具合が現れるのかについて、過去の国語教育や学校文法に準拠した方法で分類を試みた。その結果、述語の語句や形式が主語に対応していない主語と述語の不照応が68.5%と突出して多く見られ、そのうちの71.6%が名詞述語文の不照応にかかわるものであった。

以上から、主述の対応関係の不具合は母語話者の作文における問題の1つとされているが (1) 年齢が上がるにつれて減る傾向にあり、不具合の種類により消滅する時期が異なること、(2) 全ての構文における主述の不一致が問題となるわけではなく、名詞述語文を中心とする特定の構文に顕著に見られる可能性があることが分かった。

2.2 日本語学習者を対象にした作文研究

日本語母語話者を対象とした主述の対応関係の不具合の研究が多く行われているのに対し、日本語学習者を対象としたものは、授受や他動詞等、各文法項目の誤用分析に特化したものが中心である。一方で、主述の対応関係の不具合を扱ったり、名詞述語文に着目して分析を行ったりしたものは二通・佐藤 (1999)、中村 (2002)、楊 (2014)、砂川・清水 (2017) 以外ほとんどない。

大学入学時の留学生のレポートに見られる問題の1つとして主述の対応関係の不具合を取り上げている二通・佐藤 (1999) は、主述のねじれは比較的日本語能力が高い学習者に見られる誤用であるとし、学習者が長い文を書くことが

上達の証だと考えていることが産出の背景にあるのではないかと指摘している。また、中級学習者の作文に現れる受身文の誤用例について分類した中村 (2002) では、主語が省略されている複文の従属節、もしくは主節に主述の対応関係の不具合が多く見られることから、学習者の主語省略の理解が不十分であることが不具合を引き起こす原因の1つではないかと考察している。楊 (2014) は中級日本語学習者の作文における困難点として、文構造の呼応関係が全体の誤用の1割を占めるとし、名詞文、受身文、動詞文に置ける誤用例を取り上げている。また呼応関係の誤用については、学習者が自己訂正できることも多く、客観視することの重要性を論じている。しかし、これらの研究は、誤用例を挙げることが中心であり、主述の対応関係の不具合が起こる原因について解明しようとしたものではない。砂川・清水 (2017) は、日本語母語話者の名詞述語文に主述の対応関係の不具合が多く出現することをふまえ、台湾の大学生による日本語学習者作文コーパスLARP at SCUに現れる名詞述語文の実態を調査した。14名の縦断データを分析した結果、文末が主語と呼応する名詞述語文になっていない不具合が39.4%と名詞述語文における誤用の中では最も多いことが分かった。またこの種の問題は特に初期 (大学1年生後期以降) に多く出現し、徐々に減少する傾向にはあるものの、4年生になっても依然としてなくなることが分かった。また、「私の夢」や「問題」など抽象名詞を主題によく場合の不具合が、学年が進んでも残る傾向にあった。これについて砂川・清水 (2017) は、学習者が実際に使用した教科書分析の結果もふまえ、授業で名詞述語文の提示や主述の対応関係の不具合に対する訂正を受けることはあるかもしれないが、指導項目として取り上げられることがない可能性を指摘している。

以上から、学習者の作文においても主述の対応関係の不具合は問題の1つとされており、(1) 中級以上の学習者にも主述の対応関係の不具合の問題が見られること、(2) 受身と他動詞の混同や抽象名詞主題文など、複数のタイプの問題が観察されていること、(3) 文章を長く書こうとする意識や構文規則の理解の欠如、指導不足などが主述の対応関係の不具合を引き起こしている可能性があることが分かった。一方で、学習者の場合、母語の影響を受ける可能性があることや、日本語の文法的直観を持たないことを考慮し、問題の所在を具体的

に分析した上で、指導に結び付けることが重要であるが、そうした観点からの研究は進んでいないことが分かる。

2.3 先行研究に残された課題

ここまで、日本語母語話者と学習者の作文に見られる主述の対応関係の不具合を取り上げている先行研究を紹介したが、学習者の場合は習熟度が中級以上になっても依然として見られる上、名詞述語文や理由表現以外の様々な文において問題が見られる点で母語話者と異なっていた。その一方で、日本語学習者の主述の対応関係の不具合に主眼をおいて扱った研究はなく、どのような問題が生じているかという実態の把握や、母語話者の小中高生に生じる問題との違いについては明らかになっていない。それゆえに、文のねじれが生じる原因については推測の域を出ておらず未解明であるという課題が浮き彫りとなった。伊坂(2012)は、日本語母語話者の場合、学年が上がると主述の対応関係の不具合が徐々に減少していることから、母語話者は内省する意識を身に付ければ、直感で問題に気づき修正ができる可能性があるとは指摘している。その一方で、学習者のように目標言語での直感を持たない場合、明示的な規則を知識として習得する必要があることに加え、母語が影響する可能性も否めない。先述の通り、学習者の作文に現れる主述の対応関係の不具合が日本語教師からの作文評価に大きく影響することもふまえると、問題の実態を具体的に明らかにすることは急務であり、原因の追究につなげることで、それを防ぐための効率的な指導や支援を検討すべきである。

そこで本研究は、学習者の作文に現れる主述の対応関係の不具合について、どのような問題がどの程度起こるのか、母語が異なる上級学習者の作文資料分析に基づいて、実態を明らかにすることを目的とする。なお、事前に異なるレベルの学習者の作文を分析した結果、ある程度の長さの作文を産出することができ、主述の対応関係の不具合が生じていても文意が読み取れるレベルとして本稿では上級学習者を対象として扱う。

3 分析

3.1 分析対象

本研究では、『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』(通称YNUコーパス)に収録されているデータのうち、「七夕」をテーマに書かれた作文資料を分析の対象とした。このコーパスには、日本語母語話者である大学生30名と留学生60名(中国語母語話者30名、韓国語母語話者30名)を対象にした作文が収集されている。学習者は事前に母語による「七夕伝説」を読んでおり、「あなたは、小学校新聞の昔話コーナーで、あなたの国の昔話を書いてほしいと頼まれました。(中略)小学生に分かるように、どのような話が詳しく書いてください。」というタスクに基づき作文を書いている。一定の長さがあり、内容の統制が比較的できていること、複数の登場人物が登場するため主述の一致が適切に行えないと読者が混乱する可能性があることから、本研究の課題を明らかにするのに適していると判断した。留学生は大学の講義を日本語で受けることができる上級レベルであるが、①タスクの達成、②タスクの詳細さ・正確さ、③読み手配慮、④体裁・文体、の4つの項目により母語話者に事後評価され、下位群(L)、中位群(M)、上位群(H)に分けられた上で収録されていた。本稿ではこれに従い、3つの習熟度別の群に分けて考察を行った。以降、本文中では、学習者の母語(中国語C、韓国語K)、習熟度、通し番号で話者を表す。

3.2 分析方法

資料の分析は、執筆者である日本語母語話者2名(いずれも5年以上の日本語教育経験があり、高等学校教諭の免許状(国語科)を持つ)で行った。分析の手順については、①分析者が、まず調査対象とする作文資料60編を読み、「主述の対応に不具合が見られることが原因で文意が取りにくい/日本語として不自然であると感じるもの」にアンダーラインを引いて抽出した。②その後、後述の分類基準に従い分類を行った。分類する作業は個別に行った上で照合し、意見が分かれるものについては、話し合いにより決定した。なお、表記、語彙、文法上の

誤用により書き手の文意がとれないものは対象から除外した。また、以下の例のように主述の関係性にかかわらず形式や活用の誤用、および、時制の不一致は、本稿で取り上げる問題とは異なるため、結果には含まない。

例3) チゲニョも優しくてかわいいでした (⇒かわいかったです)。 (KL2)

例4) 織姫は服を織わなくなった (⇒織らなくなった)。 (CM6)

分類の基準としては松崎 (2015) における「主述の不具合の分類」を援用した。これは、中学生の作文に見られる主述の対応関係の不具合を分類するため、先行研究での結果をふまえながら、学校文法に準拠する形で設けられた指標である。本分析を実施した時点で、日本語学習者の主述の対応関係の不具合に関する分類が見当たらなかったことに加え、本稿では母語話者を対象とした先行研究の結果と比較を行うため、この分類を用いることとした。具体的な分類の枠組みと実際に見られた不具合の例を表1に示す。

表1 学習者の作文における主述の対応関係の不具合の分類 (松崎 2015 改)

種類	定義と例
(1) 主語または述語の重複	主語または述語に相応する成分が繰り返されている不具合。 (該当例なし)
(2) 主語または述語の脱落	主語または述語に相応する成分が脱落している不具合。 例) そんな二人のことをかわいそうに思った二人の友だちである「カチ」と「カラス」は良いアイデアを出しますが (⇒ <u>出</u> します。「それは」に変更) なんと自分たちの体で橋を作ることでした。
(3) 主語助詞の誤用	主語を示す助詞の使い方が誤っている不具合。 例) しかし、これから悲劇の (⇒ <u>が</u>) 始まってしまった。
(4) 主語と述語の不照応	述語の語句や形式が主語に対応していない不具合。
述語語句の不備	述語を構成する語句が主語に対応していない不具合。 例) 姫のお父さんは (中略) 自分の息子 (⇒娘) と結婚して (⇒ <u>させて</u>) あげようと思いました。
述語形式の不備	主語に対応する形式が述語に欠落している不具合。 例) 神様は (中略) ジニョンが可哀想だったので (⇒ <u>だ</u> と <u>思</u> った <u>の</u> で)
主述間の語句の重複	主語にも述語にも同じ語句が重複している不具合。 例) 名前は織姫という名前 (⇒ <u>不要</u>) です。

(1)「主語または述語の重複」は、主語または述語のいずれかに相応する成分が、主語、述語以外の文要素として文中で再度繰り返されているものを指す。松崎 (2015: 14) では、「(てんちょうはいました。)このキツネはボクのお母さんです」といいました。」という例が挙げられているが、本稿ではこれに対応する例が見つからなかった。(2)「主語または述語の脱落」は、主語または述語に相応する成分が脱落しているものを指す。(3)「主語助詞の誤用」は、主語を示す助詞の使い方が誤っているものを指し、(4)「主語と述語の不照応」は、述語の語句や形式が主語に対応していないものを指す。(4)「主語と述語の不照応」に関しては、松崎 (2015) において、上記4分類中の68.5%とかなり多くの数を占めたため、さらに「述語語句の不備」「述語形式の不備」「主述間の語句の重複」に下位分類されている。本稿で分析したデータには、松崎が例に挙げているような主語に対応する語句を述語に補う必要がある「述語語句の不備」は見当たらなかった。代わりに、自動詞・他動詞や受身形、使役形の使用・不使用というように、対応関係にある語句の選択の誤りにより、述語形式が主語に対応していない不具合が散見された。こうした事例は中学生以上の母語話者の作文にはあまり現れないと考えられるが、学習者の作文には比較的多く観察される上、内容の解釈にもかかわる。そこで、本稿ではこのような事例を「述語語句の不備」として分類することとし、分析、考察を行った。「述語形式の不備」については、いわゆるねじれ文と呼ばれる名詞述語文の誤りもここに含まれる。以降、学習者による作文例は原則、原文のまま示し、下線部分は分類の対象とした不具合を、⇒は分析者による修正結果を表すものとする。

4 結果と考察

まず、表2に主述の対応関係の不具合の出現数を母語と習熟度別に示す。

表2 学習者の作文における主述の対応関係の不具合の出現数と割合

種類	CL	CM	CH	KL	LM	KH	計
(1) 主語または述語の重複	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
(2) 主語または述語の脱落	1 2%	0 0%	0 0%	0 0%	3 5%	2 3%	6 9%
(3) 主語助詞の誤用	7 11%	2 3%	0 0%	1 2%	3 5%	3 5%	16 25%
(4) 主語と述語の不照応	9 14%	5 8%	6 9%	9 14%	9 14%	5 8%	43 66%
述語語句の不備	6 9%	3 5%	3 5%	8 12%	4 6%	4 6%	28 43%
述語形式の不備	2 3%	2 3%	3 5%	0 0%	4 6%	1 2%	12 18%
主述間の語句の重複	1 2%	0 0%	0 0%	1 2%	1 2%	0 0%	3 5%
主述の対応関係の不具合 合計	17 26%	7 11%	6 9%	10 15%	15 23%	10 15%	65 100%
不具合がある作文数/各10本	8 21%	5 13%	5 13%	6 16%	8 21%	6 16%	38 100%

(1) 主語または述語の重複は本稿で対象としたデータ内には見られなかった。重複は母語話者の中学生の作文にもほとんど見つかっておらず(内田・瓜生1996, 松崎2015)、特に上級レベルの学習者にとっては大きな問題ではないと考えられる。

次に、(2) 主語または述語の脱落が、CLに1例、KMに3例、KHに2例見られた。

例5) いかりが爆発した王様は逃げ回ったキョンウとチックニョが(⇒を)(⇒「追いかけてきましたが、」を追加) 王様の偉大なる力は神にも匹敵していましたので二人は逃げ切れず王様に捕まえて(⇒捕まえて/捕まえられて)しまいました。(KM3)

6例のうち、上に挙げた例5のみ述語要素が脱落している例であり、他は例6、例7のような主語の脱落であった。さらにこのうち、2例は、例7のように、指示詞の脱落(省略)により文意が不明になっていた。

主語の脱落が起こっている例はいずれも複文であるが、文頭近くに置かれた主題から述語までの間に挟まれた文要素が多いことが共通している。日本語の主題を表す「は」は、「「は」のピリオド越え」(三上1960)で知られるように、後の節や文の主題にもなり得る。それゆえ、前節、もしくは、前文と同一の主題でないにもかかわらず、後節、後文の主題が明示されていない学習者の例は不具合だと判断されたと考えられる。こうした不具合は、以下のように、文を短く区切り、述語に対応する主題を明白にするよう書き手が意識することで防げる可能性がある。

例6) その男性の名はギョンウと言い、(⇒「言いました。ギョンウは」に変更) 牛を上手に扱い、人間界での食糧を次々と栽培し、(国を)豊かにしていたのです。(KH6)

例7) そんな二人のことをかわいそうに思った二人の友だちである「カチ」と「カラス」は良いアイディアを出しますが、(⇒「出しました。それは」に変更) なんと自分たちの体で橋を作ることでした。(KM7)

(3) 主語助詞の誤用は、CLに7例と最も多く見られたものの、CMで2例、CHでは見られなくなり、中国語話者の場合はレベルが上がると減っていく結果となった。一方、韓国語母語話者は、KLで1例、KM、KHで各3例とレベルが上がっても減らなかった。実際に不具合が生じている例を見ると、中国語母語話者の場合、「は」とすべきところを「が、を、の、で、には」、「が」とすべきところを「を、に」と多様な助詞を用いていた。母語に、日本語の「は」と「が」に相応する使い分けや、「が」に相応する助詞形態を持たない中国語母語話者^[註1]のうち、特にCLの誤用例には規則性が見られず、主題や主語を表す名詞句にどの助詞を使用すればいいのか、迷いが見られると考えられる。

例8) しかし、これから、悲劇の(⇒は)始まってしまった。(CL4)

例9) 二人で(⇒は)好きになって結婚する。(CL6)

それに対し、韓国語母語話者は「が」とすべきところを「を」にする誤用が7例中4例を占めている点で特徴的であり、他に「が」とすべきところを「に」、「は」とすべきところを「が」、「は」の脱落が1例ずつ見られた。「が」とすべきところを「を」にする誤用については、以下の例のようにいずれも韓国語では日本語の「を」に対応する「을/를」を使用する用例であり、母語の類似した助詞体系をそのまま転移させたために生じた誤用であると考えられる。

例10) それを見たカラスたちとカチたちは、二人を(⇒が)会えるようにするため (KM3)

例11) 二人は別れの悲しみを(⇒が)絶えず毎日 (KM8)

(4) 主語と述語の不照応については、事例が最も多く合計43例観察された。以下に3つの下位分類の順に結果を示す。

まず1つ目に、「述語語句の不備」とは、述語を構成する語句が主語に対応していない不具合のことである。具体的には、自動詞・他動詞や受身形、使役形、授受表現などの使用の有無のように、対応関係にある語句の選択を誤ることにより、述語形式が主語に対応していない不具合を指す。こうした不具合は先行研究でも指摘されているが、本稿でも28例観察され、主語と述語の不照応のうちの65%を占める。母語にかかわらず、習熟度が下位群から中位群になると半数に減るが、上位群になっても依然、残る不具合である。特に中国語母語話者は75%が自他動詞の対応に関する不備であり、日本語と中国語の相違が影響していると考えられる。一方、韓国語母語話者は、使役が38%、授受表現が25%、受身が19%、自他動詞が13%の順で不具合が見られた。このタイプの不具合は、母語話者の中学生にはほとんど見られないと報告されている(矢澤2014)ものであるが、母語話者のような直感を持たない学習者の場合、習得困難な項目の1つであろう。読み手が文意を正確に読み取れず、誤解を招く可能性があることから、繰り返し練習を行うなどの対策が求められると言える。

例12) こうして、織姫と牛飼いは無理やりに別れさせてしまいました(⇒別れさせられてしまいました)。(CH8)

2つ目に、「述語形式の不備」とは、主語に対応する形式が述語に欠落している不具合を指す。中国語母語話者に7例、韓国語母語話者に5例観察されたが、実際の用例を見てみると、母語によって不具合の種類が異なっている。具体的には、韓国語母語話者の不具合は、主語に対応する「と思う」などの表現の欠如、もしくは過剰挿入と、名詞述語を動詞述語に直す必要があるものであった。

例13) 神様は(中略)ジニョンが可哀想だったので(⇒だと思ったので) (KM2)

例14) それがある日、人間界に牛を飼っているギョヌでした(⇒を見つけました)。 (KM2)

一方中国語母語話者による不具合は、7例中、中級以上の4例は下記のようにいずれも主題が抽象名詞であることから、述語を名詞化するなど適した形式にすべき例であった。

例15) 織姫の仕事は神様たちに服を作ります(⇒作ることです)。 (CM1)

例16) 大事なことは、心がとてもやさしい人だ(⇒だということだ)。 (CH3)

こうした不具合は、韓国語母語話者には観察されておらず、中国語母語話者のみに観察されることから、母語が影響している可能性がある。実は韓国語には、日本語の用言や節を名詞化する「こと」と類似の機能を持つ「것 (geos)」という形式が存在する(丁2017)。それに対し、中国語の場合、文中の位置によってその目的語が名詞の性格を有すると判断されるため、「こと」に相応する表現が存在しない^[註2]。それゆえ、抽象名詞が主題となる場合に、文末の表現形式を呼応させることへの意識が向かなかった可能性があると言えよう。

母語の影響は様々な形で第二言語習得に影響を及ぼすとされるが、上級になっても母語と学習言語の違いが目標言語形式の産出を妨げる場合がある。ただし、松崎(2015)のように日本語母語話者の中学生の作文にも、抽象名詞を主

題とした名詞述語文に不具合が見られるとの報告もあることから、今後、この種の不具合が起こる原因について、母語の影響やそれ以外の影響を考慮しながら検証していく必要がある。なお、母語話者を対象とした先行研究と比べ、不具合の用例数が少ない点に関しては、上級学習者であること、登場人物について述べる文が多かったため、先行研究で扱われた意見文のように抽象名詞を主語とする文自体が少なかったことが原因であると考えられる。

最後に「主述間の語句の重複」については、全部で3例と用例数は少ないものの、両母語話者に以下のように類似する不具合が見られた。

例17) 名前は織姫という名前 (⇒不要) です。 (CL2)

例18) 娘の名前はジクニョという名前 (⇒不要) でした。 (KM10)

例19) そのとき目に入ったある男の人が「キョンウ」という名の人でその人の仕事は牛を育てる仕事 (⇒こと) でした。 (KL6)

これらの例は、抽象名詞を主題とする短い文の中で、主述に同じ名詞を重複させることで、読み手に冗長な印象を与えている。久野 (1978) によると、主題として提示された名詞はその話題が続く限りいかなる文法的役割であっても再度現れる場合には省略することができる。主題である語句の繰り返しが許容されるのは、当該主題の協調や場面の転換など、有標化を行う場合であるが、ここではそのような意図がないため不具合と判定されたと考えられる。なお、本稿では、松崎 (2015) で見られた「この本から学んだことは、練習をしっかりとやることの大切さを学びました (⇒である)。」のような形式名詞を主題とする場合の主述の対応関係の不具合は見当たらなかった。

5 本稿の成果と今後の課題

本研究は、母語が異なる上級学習者の作文60編をもとにして、学習者の作文に現れる主述の対応関係の不具合に、どのような問題がどの程度起こるのかという実態を調査した。その結果、65例の不具合が見つかり、「主語と述語の不照応」「主語助詞の誤用」「主語または述語の脱落」の順で多く見られ、大まかな

傾向については、松崎 (2015) における母語話者の中学生と一致するものであった。しかし、実際に学習者の作文に現れた不具合を観察すると、助詞選択の誤りなど、母語の影響が疑われる事例があり、不具合が生じる原因については母語話者と異なる可能性が示唆された。さらに、最も不具合が多く見られた「主語と述語の不照応」については、「述語語句の不備」、「述語形式の不備」、「主述間の語句の重複」の順で不具合が多く観察された。「述語語句の不備」に関しては、母語話者の不具合とは性質が異なることから、学習者独自の習得上の問題として扱う必要があること、「述語形式の不備」については、母語に類似した形式を持たない中国語母語話者にとってとりわけ困難である可能性があること、「主述間の語句の重複」については、日本語の主題を表す「は」の機能について理解が必要であることが示唆された。こうした問題については、今後異なる習熟度や母語、文法性判断課題などを用いて調査検証を進めていくことで、教師ができる支援について検討を続けていきたい。 (広島大学・桃山学院教育大学)

付記

本稿は、2016年11月20日に行われたThe 11th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies (於香港公開大学)での発表に加筆・修正を加えたものです。会場で貴重なご意見をくださった小森万里先生(大阪大学)、本稿執筆、分析に際しご助言くださった劉志偉先生(埼玉大学)、森勇太先生(関西大学)にお礼申し上げます。本稿は、科学研究費助成事業若手研究(B)課題番号17K17989の助成による研究成果の一部です。

注

[注1] …… 厳密には、「由我来说(私から説明します/私が説明します)」のような場合、「由」が「が」に相応すると考えられるが、一般的には中国語には日本語の「は」と「が」に相応する形態が存在しない。

[注2] …… 中国語では、「織姫的工作 是 為衆神做衣服。(神様たちに服を作ることが織姫の仕事です)」のように、文末の目的語の位置に「做(作る)」があることで日本語の「作ること」と相応の機能を有すると解釈される。「織姫為衆神做衣服。(織姫が神様たちに服を作ります)」と比較すると、日本語の「〜こと」に相応する表現形式がないことが分かる。

参考文献

- 伊坂淳一 (2012) 「中学生の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』60, pp.63-71. 千葉大学教育学部
- 伊坂淳一 (2013) 「小学校高学年児童の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』61, pp.15-22. 千葉大学教育学部
- 内田安伊子・瓜生佳代 (1996) 「母語発達と文のねじれとの関連—「…は+述部」の構造を持つ文について」『言語文化と日本語教育』12, pp.89-92. お茶の水女子大学日本語文化学研究会
- 川上麻理 (2005) 「汎用性のある作文評価基準の提案を目指した評価項目の検討—日本語教師を対象とした実態調査を通して」『ICU日本語教育研究』2, pp.23-33. 国際基督教大学
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 小口悠紀子 (2017) 「初・中級教科書における名詞述語文「(抽象・形式名詞) は～ことです。」の扱い—学習者の作文に現れるねじれ文の問題から」『日本語研究』37, pp.121-136. 首都大学東京／東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- 砂川有里子・清水由貴子 (2017) 「台湾の大学生による名詞述語文の習得状況—日本語学習者作文コーパス LARP at SCU と教科書の調査に基づいて」江田すみれ・堀恵子 (編) 『習ったはずなのに使えない文法』 pp.1-24. くろしお出版
- 丁仁京 (2017) 「韓国語の形式名詞 ‘것 (geos)’ と日本語の形式名詞の対照研究」『福岡大学人文論叢』49(3), pp.839-870. 福岡大学研究推進部
- 中村祐理子 (2002) 「中級学習者の受け身使用における誤用例の考察」『北海道大学留学生センター紀要』6, pp.21-36. 北海道大学留学生センター
- 二通信子・佐藤不二子 (1999) 「留学生のためのアカデミックライティング教材の開発に関する研究」『北海学園大学学園論集』99, pp.67-84. 北海学園大学学術研究会
- 松崎史周 (2015) 「中学生の作文に見られる「主述の不具合」の分析—出現傾向から学習者の表現特性を探る」『解釈』61(5・6), pp.12-20. 解釈学会
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 矢澤真人 (2014) 「抽象名詞主題文研究の意義—作文を支援する語彙・文法研究の観点から」『漢日語言対比研究論叢 (第5輯)』 pp.1-14. 漢日語言対比研究会
- 楊帆 (2014) 「中級日本語学習者の作文における困難点—文構造の呼応関係について」『秋田大学国際交流センター紀要』3, pp.15-28. 秋田大学国際交流センター
-

資料 (コーパス)

- 金澤裕之 (編) (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
-